



东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

时晓阳 著

「断り」からみた日本人
の対人コミュニケーションの特徴

从拒绝行为 看日本人的交际特点

(日文版)



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

封面插画
松泽弥香 《宫岛》



东亚语言研究论丛
EAST ASIA
LANGUAGES STUDIES

从拒绝行为
看日本人的交际特点

(日文版)

「断り」からみた日本人
の対人コミュニケーションの特徴

时晓阳 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书以针对请求的日语拒绝言语行为为例,援引“DP理论”,从话语层面对日语拒绝言语行为进行了动态分析,探讨了日本人的交际特点。具体从会话的展开模式、拒绝行为的具体策略和礼貌标识的角度,对日语拒绝言语行为进行了全面深入的考察,得出日语母语者主要以开始会话的 Alter(s)行为及拒绝的辅助行为 Supportive Move(s)来展开会话的特点,验证了日语母语者的拒绝行为中“回避先行型”策略的使用,及“ちょっと”和“中途終了文”与拒绝策略的结合运用,对于调节人际关系的重要作用。本书适合日语专业研究人员使用。

图书在版编目(CIP)数据

从拒绝行为看日本人的交际特点:日文 / 时晓阳著.

—上海:上海交通大学出版社,2019

ISBN 978-7-313-17600-4

I. ①从… II. ①时… III. ①日本人-文化交流-研究-日文 IV. ①G131.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2019)第 203156 号

从拒绝行为看日本人的交际特点(日文版)

著 者:时晓阳

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

印 刷:江苏凤凰数码印务有限公司

开 本:710mm×1000mm 1/16

字 数:246千字

版 次:2019年10月第1版

书 号:ISBN 978-7-313-17600-4/G

定 价:68.00元

地 址:上海市番禺路951号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:12.5

印 次:2019年10月第1次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:025-83657309

序



时晓阳在上海外国语大学攻读硕士时是由我指导的,当时大连外国语大学的陈岩老师向我推荐了她。大连外国语大学的日语教学水平有目共睹,毕业生的日语能力和研究能力也是值得信任的,因此,我欣然接受指导时晓阳同学的硕士研究。当时她的研究课题是日语可能表达的特点,对日语的可能表达做了较为深入的探讨。

2011年已经成为同济大学青年日语教师的时晓阳,为了进一步加强科研能力,拓展科研视野,再一次考入上海外国语大学,攻读日语语言文学博士课程。这一次是进行更为深入的科学研究和扎实的学术探讨。做学问需要严谨求实,需要对日语教育和日语研究有实际的参考价值。时晓阳完成的博士论文,可以说体现了这几方面的要求。此次能够将博士论文进一步完善和充实,并进行出版,作为导师很为她感到高兴,欣然为她作序。

本研究选择了“从拒绝行为看日本人的交际特点”作为课题,这是从语用学的视角来探讨交际行为的研究。拒绝行为从本质上来说是威胁或损害对方面子的。虽然同属东方文化圈,但是日本人和中国人在实施拒绝行为时仍然有所差异。文化的差异反映在语言表达、行为交际中,可以通过对具体的交际行为的分析来体现。纵观目前的研究,国内日语界对交际行为的研究或聚焦于社会语言学的角度,或侧重于对意义公式的运用情况的分析,研究资料多采用了现有的文学作品等,或使用 DCT(语篇测试)等方法。时晓阳参照日本的语言学界对交际行为的研究方法和思路,采用了实际语言会话的调查方法,搜集实际的



日常会话作为分析材料,使分析结果更具有说服力和可靠性。

会话调查是此次研究的基础,相当费时费力,特别是此次会话调查设定了3种场景,以及1个拒绝方与9个不同请求对象的会话,共搜集了中日180组会话,其前期工作量之大可以想象。这些翔实的材料保证了调查结果的可靠性。

当然,分析工作才是本研究的主要内容。仅以“タグ付け”一项来说,既要求在调查阶段的布局设计必须详细周到且科学合理,在标注时更需要遵循“话语礼貌理论”及相关语用学理论原则,逐字逐句地进行细致缜密的分析与判断。值得肯定的是,时晓阳能够深刻理解“话语礼貌理论”的内涵,并将其作为理论依据,对中日拒绝行为的会话进行有理有据的分析,并取得了本次研究的创新性成果。

纵观当前对话用学的研究,仍然以英语界为中心。由于语用学的很多理论来自英语国家,国内的日语界对话用学的研究以探讨理论问题居多,如此次通过实际的会话调查,来对理论问题进行反证的还不多见。此研究的成果值得肯定。

时晓阳老师敏而好学、勤奋刻苦,相信通过这次调查和研究,她已经能够掌握学术研究的基本要求,并具有较强的研究能力。作为导师感到很欣慰。希望在今后的科研和教学工作中,时晓阳能够继续不断地努力,在日语教学和科研领域取得更大的成绩。是为序。

皮细庚
2019.8.19

前 言



近年来,语用学对礼貌问题的研究已从单个语句层面扩展到话语层面,即不只关注单个语句的礼貌程度如何,而是对言语行为整体的礼貌状况进行把握。以跨文化交际为例,不同文化背景下的人们在不了解对方文化背景的情况下进行跨文化交际时,很容易产生交际误解,从语用研究的角度来说,即体现为言语行为整体的礼貌问题。

日语中对拒绝言语行为的研究侧重对拒绝策略的分析,尚缺乏话语层面的分析,缺少对拒绝言语行为整体的礼貌状况的把握。本书从话语层面,对日语拒绝言语行为的整体进行了分析,以展示其礼貌状况,并将日语母语者与汉语母语者的拒绝行为进行对比,找出日语拒绝行为的礼貌特点。

本书以针对请求的日语拒绝言语行为为例,探讨了日本人的交际特点。涉及两个方面的问题:礼貌问题和拒绝行为。在先行研究的基础上,主要依据 DP 理论(Discourse Politeness Theory),从话语层面分析日语拒绝行为和汉语拒绝行为的基本展开模式,认为在跨文化交际场景下,如果交际双方按照各自文化背景下的话语展开模式进行交际,则交际双方对礼貌的期待值和估算值容易产生偏差,进而产生交际误解。

由此,提出本研究的课题如下:日语拒绝行为和汉语拒绝行为的会话展开模式在不同阶段具有哪些异同点,以及根据请求事件的难易程度及人际关系的不同,展开模式呈现怎样的变化;根据 DP 理论,日语拒绝行为和汉语拒绝行为的“基本态”是怎样的,有哪些异同;拒绝行为中,交际双方具体是采取怎样的手段来达到相互理解及保持良好人际关系的目的,这些手段又有



哪些特点。

本书采用了实证性研究方法,通过会话调查,收集了日语和汉语共 180 份会话资料。对这些语料中的拒绝行为从以下四个角度进行了动态的分析。

首先,从会话展开模式的角度,对拒绝行为进行了全面深入的考察,发现为降低对方面子损害的辅助行为 **Supportive Move(s)**,在日语拒绝行为中主要集中于“拒绝成立前”和“拒绝成立后”两个阶段,而在汉语拒绝行为中主要集中于“开始部分”和“拒绝成立前”两个阶段。即日语母语者拒绝方侧重在拒绝时和拒绝后表达对拒绝的歉意,以降低对对方面子的损害,而汉语母语者拒绝方侧重在拒绝前和拒绝时进行。可以总结出日语母语者以开始会话的 **Alter(s)** 行为及拒绝的辅助行为 **Supportive Move(s)** 为主展开会话的特点。

从话语层面的礼貌表达效果看,通过对比日语和汉语拒绝行为的“基本态”,发现两者存在差异。日语中的“寒暄”“回避”及“道歉”等发话项目在汉语中并未出现,而汉语中的“提示请求”“请求确认”及“应答”等发话项目在日语中也未出现。可以预见在跨文化交际场景下,如果交际双方都按照各自拒绝行为的“基本态”进行交际,容易产生交际误解。这一分析可以看作是对“DP 理论”基本概念的实际检验,证明了该理论的可行性。

从具体层面分析日语母语者和汉语母语者的拒绝策略的使用状况,发现日语母语者的拒绝行为以“回避先行型”为最多,而汉语母语者的拒绝行为以“理由先行型”和“拒绝先行型”为最多。在拒绝策略的使用频率方面,日语中以“道歉”为最多,而汉语中以“说明理由”为最多。

最后,对日语拒绝行为中作为礼貌标识的「ちょっと」及「中途終了文」的使用状况进行了考察。确认了两者在拒绝行为中对调节人际关系产生的作用,及对礼貌效果产生的影响。

通过与汉语拒绝行为的对比研究,本书进一步明确了日语和汉语拒绝行为在话语层面的礼貌表达效果及拒绝策略的运用等方面存在的差异,可为中日跨文化交际乃至其他母语者与日语母语者的跨文化交际、为日语和汉语礼貌问题及拒绝行为的研究乃至教学提供参考。

语用学研究侧重对语言实际运用过程中的规律探寻,从语法特点到语用特点,日语都呈现出与汉语巨大的不同。反映出即使同处亚洲、互为邻国,即使同属东方文化,在生活和思维方式的细处,中日两国人们仍然存在不少的差异。语言的差异反映文化的差异。当今,我国在国际交往中所采取的方针政策便是“求同存异、存异求同”,如何在差异中寻求共通之处,如何尊重彼此差异而共同发展,从语言的角度来讲,便是尊重对方的交流沟通方式,采取与对方相对一致的沟通方法,达到相互理解、协同发展的目标。

本书基于笔者的博士论文修改和完善而成,在博士论文和本书的撰写过程

中,得到了导师上海外国语大学皮细庚教授的悉心指导和鼓励。皮老师以深厚的学养指导学生一步步进入学术的世界,完成初次的学术探索,使笔者对学术研究有了全新的理解和认识;皮老师以坦荡的大家风范给学生以广阔的学术态度的影响,使学生能够以更高的境界、更踏实的心态从事学术的探索,能够更深入地思考一些专业的学术问题;此次导师更是在百忙之中为拙著撰写序言,在此,谨向皮老师致以学生最衷心的感谢!

撰写博士学位论文期间,得到了家人的鼎力支持。在此,要感谢养育我的父母,始终给我以最强有力的支持和鼓励,他们始终是最坚强的后盾,让我勇敢前行;感谢我的姐姐,从小到大似母亲一样地关心和照顾我;感谢公婆的大力支持,他们为小家付出了很多;感谢我的丈夫,从报考博士,到攻读博士,都给我以强有力的支撑;感谢我的两个宝贝,他们是我前行的动力。

此次拙著得以出版,还要感谢上海交通大学出版社副总编陈勤老师的大力支持,陈老师为拙著的出版做了很多协调工作,在此向陈老师致以诚挚的谢意。感谢编辑幸丹丹老师,她专业、细致而认真的编辑工作使得拙著在语言表达方面得到很大的改善。希望拙著能够为专业研究提供一点点借鉴和参考。不足之处,恳请同行指正。

作者

2019.5.9

目 次



第 1 章 序論	1
1.1 言語観	3
1.2 研究目的と意義	5
1.3 本書の構成	7
第 2 章 問題提起と先行研究	9
2.1 問題提起	11
2.2 「ポライトネス」に関する先行研究	12
2.3 「断り」に関する先行研究	18
2.4 先行研究の問題点	22
第 3 章 理論枠組みと研究課題	25
3.1 本研究で扱う「ポライトネス」	27
3.2 理論枠組み	29
3.3 本研究の位置づけ	33
3.4 本研究の課題	35
3.5 本研究における主要な用語の概念規定	36
第 4 章 調査研究	43
4.1 調査研究の準備	45
4.2 会話調査	48
4.3 会話資料の文字化	51
第 5 章 会話資料の詳細内容と分析方法	55
5.1 会話資料の詳細内容	57
5.2 分析方法	64



第 6 章	談話レベルからみた「断り」会話の展開パターン	73
6.1	「断り」会話における三要素	75
6.2	「開始部」における「断り」の展開パターン	76
6.3	「断り成立前」における「断り」の展開パターン	84
6.4	「断り成立後」における「断り」の展開パターン	93
第 7 章	談話レベルのポライトネス効果の視点からの分析	103
7.1	「断り」の「基本状態」について	105
7.2	JNSとCNSの「断り」の「基本状態」	106
7.3	用件別からみたJNSとCNSの「断り」の「基本状態」の異同	116
7.4	人間関係別からみたJNSとCNSの「断り」の「基本状態」の異同	120
第 8 章	ポライトネス・ストラテジーの観点からの分析	125
8.1	全体的な使用状況の比較	127
8.2	用件別による分析	135
8.3	人間関係別による分析	139
第 9 章	ポライトネス・マーカの観点からの分析	145
9.1	「ちょっと」とポライトネス効果	147
9.2	「中途終了文」とポライトネス効果	156
第 10 章	結論と今後の課題	171
10.1	本研究の結論	173
10.2	今後の課題	177
	参考文献	179
	索引	184



序論

第1章



1.1 言語観

言語が誕生する前、人間は手振り、身振りなどの動作、行動を通して意思や思想の交流をしたのであろう。言語というものは、誕生した時から、人間が思想や考えの交流をするための重要な道具として使われてきた。こうしてみると、言語は動作、行動に代わって人間の思想や考えを表すことができた。人間の動作、行動の役割が一部分言語によって代わられてきた。そういう意味で言うと、言語そのものは行為でもあるのではないか。

人間はこのように言語という道具を使って思想や考えを交わしあい、コミュニケーションをしている。人間の日常生活のさまざまな場面で使用されると同時に、言語は人間の日常行動をそのまま反映しているのでもある。言語という「表現・理解」行為（コミュニケーション行為）は人間によって使用され、そして人間の行動を反映している中で行われている。言い換えれば、言語行為は人間の日常行動ともなっている。更に言えば、言語というものは、人間によって使用されているところにこそ存在の意味がある。

言語行為は人間の日常生活における自己実践となっている。自己実践としての言語行為とは、具体的に言えば、たとえば、店や公共機関と交渉して自分の衣食住を保持したり、仕事や学問上の交渉を通じて自己実現したり、また、他者と考えや感情の交流を行ったりすることを指す。こうした言語行為は、「ある場において自分と他(者)とが関わる行為」そのものであると言い換えることができる(高木 2006:1)。



言語は行為の役割の一部分を果たしながら、行為をそのまま表している。行為は言語を通して人間の意思交流になり、人間の社会が円滑な存在になるために役立っている。要するに、言語はつまり行為であり、行為は言語の源である。

こうした「言語＝行為」の認識は対人コミュニケーションの考察にもつながっている。そのうえ、人間同士のコミュニケーションはつまり言語を通しての意思交流であり、意見交換の過程である。いわゆる言語行為のやり取りを意味している。そのうえ、人間同士のコミュニケーションは静的なものではなく、互いの動的なやり取りの中に存しているものである。あるいは互いの動的な言語行為のやり取りの中に存在しているものである。

特に異文化間コミュニケーションの場面においては、互いに言語が通じない、母国語の異なった人間同士が意思交流をするために、まずは手振りや身振りを使って意思を伝えあうのだろう。仮に相手の言語を習得すれば、目的言語が上達するに従い、互いのコミュニケーションは手振りや身振りが少なくなり、言語を使っての意思交流の場面が多くなる、というプロセスが想像できるだろう。

要するに、人間同士のコミュニケーションは人間の言語行為のやり取りでもあり、コミュニケーション双方の間で静的ではなく、動的に行われているものである。

したがい、人間の対人コミュニケーションの特徴を明らかにするには、まず上述した言語に対する認識を前提にし、本書の言語観を明確にしておくべきである。

言語を研究していく際、研究対象である言語というものをどのように捉えるか、すなわち言語観を明らかにしておくことは、言語を研究する者にとって重要なことだと思われる。それはその研究者の言語観が言語研究の方向を決定づけると思えるからである(蒲谷 1986)。

言語を行為と捉えて研究を行うということは、言い換えれば言語の源を追及する過程でもある。そうした考え方は時枝(1941)の「言語過程説」にも論述が見られる。「言語過程説」は「言語＝(主体による聯合の)継起的過程」、つまり、言語は主体の行為として成立するという観点を主張する論説である。具体的には次のような論述がある。

言語の本質を心的過程と見る言語本質観の理論的構成であって、それは構成主義的言語本質観或は言語実体観に対立するものであり、言語を専ら言語主体がその心的内容を外部に表現する過程と、その形式に於いて把握しようとする

ものであ(時枝 1941:3)。

言語は思想の表現であり、また、理解である。思想の表現過程および理解過程そのものが、言語である。

言語は言語主体の実践的行為、活動としてのみ成立する(時枝 1955:4)。

また、蒲谷(1999a、2013など)は、時枝(1941)の「言語過程説」の主張を引き継ぎ、そして発展させて、「言語とは行為そのものである」と考える日本語研究についても論じている。つまり、話す、聞く、読む、書く、といった行為において言語が具体的に成立し、それ以外には言語は成立しない、といった「〈言語＝行為〉観」を提出した。

具体的に言えば、「〈言語＝行為〉観」というのは、「言語」とは、行為である」と規定する言語観であり、言語の本質は「コミュニケーション行為」にあると考える言語観のことである。より正確に言えば、言語というものを「(音声・文字を「媒材」とした表現主体の表現行為および理解主体の理解行為)そのものとして捉える言語観であり、言語はコミュニケーション主体(表現主体・理解主体)の行為とは別に「存在するもの」ではなく、個々のコミュニケーション主体の個々のコミュニケーション行為として「成立すること」だとする言語観のことである(蒲谷 2013:19)。

時枝(1941)の「言語過程説」であれ、蒲谷(1999aと2013)の「〈言語＝行為〉観」であれ、まさに筆者が主張している「言語はつまり行為であり、行為は言語の源である」といった考えとつながっている。

本書は蒲谷(1999a、2013)の規定を援用し、「〈言語＝行為〉観」という言語観を前提にし、言語を静的ではなく、動的(ダイナミック)に扱いたい。そして、言語の源を追及することを一部の目的とし、あるコミュニケーションにおける言語の主体同士がどのようにコミュニケーションを行っているのか、さらにコミュニケーションをしている中、いかに円滑な人間関係を保っているのか、つまり、コミュニケーションの「ポライトネス」^①効果はどうなっているのか、を分析し、記述する。

1.2 研究目的と意義

人間の思想、考えの交流、行為のやり取りなどが言語によって代わられてきた。言語のやり取りが日常生活で重要な役割を占めるようになった。言語は人間のコミュニケーションの役割を果たしながら、人間のコミュニケーションそのものをも反映している。

① ここは特に「ポライトネス」の意味を強調するために「」をかけている、以下も同じである。



そもそも人間はどうして人とコミュニケーションをするのだろうか。それはまず、あるコミュニケーションをする目的が考えられるのであろう。例えば、自分の考えを人に伝える、或はある情報を相手に伝えるとか、また、相手の考えを知りたいために教えてもらおうとか、そういう意思伝達の類いが考えられる。それから、コミュニケーションの目的が達成できると同時に、相手とスムーズな人間関係も保っていきたいのではないか。一度のコミュニケーションのために相手との関係が悪化し、その後連絡をしなくなるとは誰もしたくないだろう。少なくとも今までの人間関係を保持していったほうが良いと思われるのであろう。

そういうふうに、いずれの国や民族にしても、どのような文化背景を持っていても、社会存在の人間として、コミュニケーションをする際、相手とスムーズな人間関係を求めるのであろう。

このようなスムーズな人間関係を保持していくために、私たちは人とコミュニケーションをする際、対人関係上の配慮をする。それは言葉に現れなくても無意識的に実行しているのである。具体的にいえば、私たちのコミュニケーションには、互いの利益に関わらない情報のやりとりをする場合もあれば、何らかの形で相手に負担をかけたり、相手の心情を害したりしてしまう可能性のある会話をしなくてはならない場合もある。その際、対人関係の上での支障が生じないように配慮して、様々な言語行動を講ずることになる(施 2007:1)。

しかしながら、コミュニケーションをする際、どうしても、誤解やミス・コミュニケーションをすることを避けられないときがある。そうした言語行動の在り方が、聞き手にもある種の解釈を要求する点で、誤解を招くこともあり、また違った意味でのコミュニケーション上の支障になることも考えられる(施 2007:1)。

特に異文化間のコミュニケーションをする際、話者が無意識的に母語文化のもとに行われているコミュニケーションの展開パターンを、相手とのコミュニケーションに持ち込んでしまったら、話し相手とスムーズな人間関係を保つていこうとは思いつながらも、両者の間で誤解を起こすことが避けられないようになる。そのような誤解を防ぐために、さまざまな場面にある文化の成員同士がいかにコミュニケーションをするのかを探ることが必要になる。

ここで注目したいのは日本文化における日本人のコミュニケーションの特徴である。日本と中国は同じアジアに位置しているが、人々のコミュニケーションは必ずしも同じような展開パターンをしているとは限らない。それが時々両国人の間の異文化コミュニケーションに支障や誤解を引き起こす一因